落選和歌集（一）

多谷　昇太

―総歌―

何として歌の荒畑（あらすた）なほ荒す好悪利害は鋤鍬ならず

精衛の空しきわざと覚えども一歌また一歌と投じてもみん

※精衛とは中国伝説上の鳥で海で遭難し溺れ死んだ娘が生まれ変わったもの。一木一石を咥えて来ては海に落としそれを埋めようとする。

生死場は無体のかぎり吾が身には死ぬるもくやし蕭紅たらむ

※蕭紅：日中戦争時の中国女流作家。中国の古い因習に逆らい、日帝に抗い、中国フェミニズムの祖であり、引いては人間存在そのものの疑問に肉薄しようとした。我国の樋口一葉同様甚だ若くして逝った。代表作「生死場」「蓮池」「手」などの名作あり。

霧笛聞けそは人の世のこゑとなん悲しびがむた人生航路（わたり）を見まし

力足踏みたる世間のおもしろやもばら差別とは力なきなり

病（いたつき）も死するも誰かよく堪ふる人悲しくば愛は来にけり

怒るをさへ愛に受くべき看護士（ひと）のゐて我はおどろきすなはち恥じぬ　※矛ヶ崎市市民病院の看護士を詠む

色町を情けにぬらす通り雨挿頭（かざし）取りなむこや高島田

咲きそめば宝玉ぬしも晴れなまし散る桜ならなほぞ美（い）しがる

花ふしど寝ばやここにし疲れ人かたへに桜なほも散るがね

世にふれば世なれ人なれとおもふのみ筑紫女王の爺とあらはる　※筑紫女王：柳原白蓮

財官暴身で知るからにおぞしかり三角まなこに壺とさるれば

マジョリティよしや統（す）ぶともなずらへて主役（ひとり）の狼煙あげぬものかも

玉造なんの小町ととこしへにな剥ぎそその衣さらしごころに　―小野小町を詠む―

風ともに去りにし君のありしまま千年も枯れぬこは和泉かな　―和泉式部を詠む―

大君にはかりかぬれば舟浮かべ彼岸さしけむえわたりたまひしや、紫式部　―紫式部を詠む―

人の世をあはれと見れば華にかへかなごころもて五行へ問ひぬ　―同右　※五行：中国五行哲学

辞世歌（うた）と見よ黒髪もちて海原に掻きて消えなむ平らがぬ身を　―小宰相を詠む―

暗闇に蛍火ひとつあくがればここぞとばかり清きかはおと　―宮内卿を詠む―

何こもるかろけき足もたろやかに送るたよりは現し身一葉　―樋口一葉を詠む―

千年も万年とてもありはせぬ不思議へいざのふ蝉時雨かな

子をどうかたのみまするとおろがむか前足合はせし母熊（クマ）撃たれ死ぬ

蜆蝶つぶ石つたひ舞ふを見しただばかりに教へらるありて

虎の尾をむんずとつかむ檻のそと互い孤鎮める冬の動物園舎　―一九七三年、ハンブルクにて。異邦人の身だった。

白孔雀聖（ひじり）があとに遊ぶなり鳥が人か人が鳥か
涅槃の写し絵　※タイ、ワット・パクナム寺院にて。

天井にねずみ駆くると和歌（うた）にありあなそよ団塊（われら）がなつかしの音（ね）

まかなしき娘子（きじ）へのこころ持ち来しぬ忘るべうやはわが虫麻呂を　※虫麻呂：高橋虫麻呂のこと

筑波山河内の歌はえもいはず愛（は）しくをかしく魂（たま）こそゆるげ

いみじくもかたじけなくは魂（たま）先祖酔いどれ船ゆ吾を覚ましき

憂き世来てあとはなければ渡るまで魂（たま）ゆく道や夢の浮橋

湯河原の沖つはるかにひかりゆれ世の遍歴にこを見つるかかな

湯河原の海のさやけささはあれどやすからで何に充てぬこころぞも

遠つ富士まえに青山八重十重かみのまれまれ見する霊界
※正月三ヶ日の富士遠景。空気が澄み切っていた。

※ここに掲載した和歌集は複数のコンクールや歌会などに出詠したものですが、見事に、すべて落選しました。しかし私が思うに昨今の選歌の基準は、(一) 歌塾に所属しているかどうか、(二) それへの出資の大小、(三) 地位・学歴、(四) 師弟関係や歌人たちとのコネ、親密度如何などのことで、決して歌そのものの出来栄えではないということです。もしそれら四つの事項に欠けるなら無名の歌人が世に出ることは殆どありません。それへの反発の意味を込めて私は自分の和歌をここに連ね、その出来不出来を読者に問いたい。「驕るな」と云われそうですがしかし素直な疑問と気持ちなのです。